

第二三章 黄金の大橋 (二三)

地の高天原は、盤古大神塩長彦系と大自在天大国彦系の反抗的活動によつて、一旦は滅茶滅茶に根底から覆えされむとした。故にその実状を述べるに先きだち、地の高天原の状況を概略述べておく必要がある。

自分の靈魂は今まで須弥仙山の上に導かれて、総て前述の状況を目撃していたが、天の一方より嚙喰たる音楽聞えて、自分の霊体は得もいわれぬ鮮麗な瑞雲に包まれた。その刹那、場面は一転して元の神界旅行の姿に立返っていた。

或いは細く、或いは広き瓢箪なりの道路を進んで行くと、そこには大きな河が流れている。これは神界の大河でヨルダン河ともいい、又これをイスラエルの河ともいい、また五十鈴川ともいうのである。そうしてそこには非常に大きな反橋が架っている。

この橋は、全部黄金造りで丁度住吉神社の反橋のように、勾配の急な、長い大きな橋であつた。神界旅行の旅人は、総てこの橋の袂へ来て、その莊嚴にして美麗なものと、勾配の急なとに肝を潰してしまい、或いは昇りかけては橋から滑り落ちて河に陥込むものもある。また一面には金色燦爛としているから、おのおの自分の身魂が映つて本性を現わすようになつてゐる。それでは中には非常な猛悪な悪魔が現われて来て渡られないので、その橋を

※住吉神社……大阪市住吉区住吉町にある元官幣大社。表筒男命・中筒男命・底筒男命と神功皇后とを祀る。今は住吉大社と称す。

通らずに、橋の下の深い流れを泳いで彼岸に着く悪神も沢山ある。それは千人に一人からの比例であって、神界ではこの橋のことを黄金の大橋と名づけられてある。

自分はこの大橋を足の裏がくすぐったいような、眩しいような心持でだんだんと彼岸へ渡った。少し油断をすると上りには滑り、下りになれば仰向けに転倒するようなことが幾度もある。要するにこの黄金の大橋は、十二の太鼓橋が繋がっているようなもので、欄干が無いかから、橋を渡るには一切の荷物を捨てて跣足となり、足の裏を平たく喰付けて歩かねばならぬ。

そうしてこの橋を渡ると直に、自分はエルサレムの聖地に着いた。この聖地には黄金とか、瑪瑙とかいう七宝の珠玉をもって雄大な、とても形容のできない大神の宮殿が造られている。

そうしてこの宮はエルサレムの宮ともいえば、また珍の宮とも称えられている。ウというのはヴェルの返し、サレムの返しがスであるから、珍しい宮という言霊の意義である。そうしてこの宮の建っている所は、蓮華台上である。この台上に上って見ると、四方はあたかも屏風を立てたような青山を廻らし、その麓にはヨルダン河が、布をさらしたように長く流れている。また一方には金色の波を漂わした湖水が、麓を取囲んでいる。その湖水の中には、大小無数の島嶼があつて、その島ごとに宮が建てられ、どれもこれも皆桧造りで、些しの飾りもないが非常に清らかな宮ばかりである。それからそこにも黄金の橋が架けられてあ

※エルサレムの宮……最高天国の中心にある大神さまのまします聖場および御教えを伝える聖場。

※蓮華台……地の高天原の中で最も神聖な靈域で、火山が爆発せずに固まった神明の降臨される靈山のこと。周囲に蓮の花弁のように山々をめぐらしている中央の台地の意。

※島嶼……〔嶼〕は小さな島 島々。

り、その橋の向うに大きな高殿があつて、これも全部黄金造りである。これを竜宮城といふ。

空には金色の鳥が何百羽とも知れぬほど翱翔し、またある時は、斑鳩が沢山に群をなして飛んでおる。そうして湖上には沢山の鶯鶯が、悠々として遊泳し、また大小無数の緑毛の亀が遊んでゐる。

この島嶼はことごとく色沢のよい松ばかり繁茂し、松の枝には所々に鶴が巢を構えて千歳を寿ぎ、一眼見ても天国浄土の形が備わつて、どこにも邪悪分子の影だにも認められず、参集来往する神人は、皆喜悦に満ちた面色をしている。これは、国常立尊の治めたまう神都の概況である。そうしてこの竜宮を占領して、自ら竜王となり、地の高天原の主権を握らむとする一つの神の団体が、盤古大神系である。この団体が、蓮華台上を占領せむとする大自在天（大国彦）一派の悪神と共に、漸次に聖地に入りこみ、内外相呼応してエルサレムの聖地を占領せむと企らんでいた。

蓮華台上に昇り、珍の宮に到りうる身魂は、既に神界より大使命を帯たる神人であり、また竜宮に到りうるところの身魂は、中位の神人であつて、今までの総ての罪惡を信仰の努めによりて払拭し、御託を許され、始めて人間の資格を備え得たものの行く処である。この蓮華台上の珍の宮は、天国のままを移写されたものであつて、天人天女のごとき清らかな身魂の神人らが、天地の神業に奉仕する聖地である。また竜宮は主として竜神の集まる

所で、竜神が解脱して美しい男女の姿と生れ更る神界の修業所である。

そうしてこの竜宮の第一の宝は麻邇の珠である。麻邇の珠は一名満干の珠といい、風雨電雷を叱咤し、自由に駆使する神器である。ゆえに総ての竜神はこの竜宮を占領し、その珠を得むとして非常な争闘をはじめている。されどこの珠はエルサレムの珍の宮に納まつている真澄の珠に比べてみれば、天地雲泥の差がある。また竜神は実に美しい男女の姿を顕現することを得るといえども、天の大神に仕え奉る天人に比ぶれば、その神格と品位において著しく劣っておる。また何ほど竜宮が立派であつても、竜神は畜生の部類を脱することはできないから、人界よりも一段下に位している。ゆえに人間界は竜神界よりも一段上で尊く、優れて美しい身魂であるから神に代つて、竜神以上の神格を神界から賦与されてゐるものである。

しかしながら人間界がおいおいと墮落し悪化し、当然上位にあるべき人間が、一段下の竜神を拝祈するようになり、ここに身魂の転倒を来すこととなつた。

(大正一〇・一〇・二二 旧九・二二 外山豊二録)

※麻邇の珠……風や雨や雷電を自由に使うことができる神徳をおさめた宝玉。潮満珠・潮干珠と言ふ。一名、満干(みちひ)の珠と言ひ、竜宮第一の宝。

※真澄の珠……宇宙一切を統御される神徳を納めた宝玉で、エルサレムの珍の宮におさまる神宝。

瑞 月

訪ふ人の無きぞ幸多さいはひからん

神の御国に遊ぶ身なれば

栄ゆべき神の御前に若返り

若がへりつゝ春を待ちませ

村肝の心に神の国あらば

夜半の山路も淋しからまし